

# Kくんと私の一年(下)

～非言語性LD児の記録～

植田 敦子

## 前回のいきさつ

落ち着きのない個性的なKくんを私は平成元年度、受け持つことになった。入学式では校長先生の挨拶に大声で答えるし、名前を書かせれば虹色の文字が描かれるわけで、とにかく他の児童から大きくはずれていた。

一学期も初めの頃は、彼なりに授業に参加していたのだが、次第に飽きてきたらしく鉛筆はKくんの大好きな太鼓のばちと化し、教室のいたる所でトントコトコ打ちならす姿が目につくようになった。そればかりか鉛筆を食べてしまうのでちびたKくんの鉛筆が落とし物箱にたまるようになり、たまりかねた私は、「鉛筆を持たせないでください」と親

に連絡した。

またKくんは給食を食べない児童でもあった。食べたとしてもものすごく時間がかかるし、偏食であった。お残りになると、教師の目を盗んで、わざとこぼしたりするので、私も思わず口元がゆるんでしまうのであった。食べる量がわずかだったにもかかわらず、Kくんの体は幼児のようにふにゃつと肉づいているのが特徴だった。

暑くなるにつれ、Kくんはくつもくつ下もぬぎだし、ペタペタという足音が耳につくようになった。持ち物の整理の悪いKくんに代わってお友達が拾ってあげたり、お帰りの会の時、私がランドセルの中に入れたりした。それで、Kくんは、自分の持ち物にいよいよ無頓着になっていった。

生活態度は悪かったKくんだが、教科の方は学習しなくてもよくできた。本好きで知識は豊富であったし、何よりもすばらしかったのが音読であった。

登場人物の気持ちを実に表す語り口で、クラスのみんなから拍手をもらう程であった。

いろいろなエピソードを作った風雲児・Kくんであったがやがて一学期、夏休みのプールも終わり、二学期が始まった。

## 九 運動会の練習

九月に入り、一年の担任三人は末に行われる予定の運動会の練習に躍起となっていた。種目は、徒競走、玉入れ、表現(ダンス)の三つだが、いずれも今一つ、びしっと決まらないので、子どもの疲れ具合や気分などおこまいなしに、何度も同じことを繰り返させていた。

表現は二年生と合同で、わらべ歌を取り入れた子どもの遊びをテーマにしたものだった。二年生はともかく、一年生は、動きを身につけるだけでも大変

なのに、その上グループ移動がたくさんあったので、要求水準が高すぎたなあと今となっては反省することしきりである。Kくんのグループは、自分がきちんと行った上、さらに彼をリードしていかなくてはならないのでいらだっていた。＼Kくんこっち＼とか、＼Kくんこうするの＼といった大きな、しかし私のことを気にしてちょっとセーブした声が耳に入った。みんなすっかりやらないと怒られ、給食も食べさせてもらえないと本気で思っていたんだろ  
うなあ。

「みなさん、ここでちょっと休憩にします。お水を飲んでもいいですよ」

「わあっ」

と、言っただけで散り散りになり、思い思いの遊びが校庭中にくり広げられた。(やっぱ子どもはこうでなくっちゃ)と思いつつも、＼集合＼と声をかけ、再び、びしりとやり始めた。あれっ、Kくんがま

た、にわとり小屋の近辺でうろろしている。

「グループの人、呼んでいらっしやい」

腕をひっぱられるように連れてこられた彼の口がなんと紫色にそまっていた。教師も子ども達もびっくり。手にはどこで見つけたのか、ヨウシュヤマゴボウのつるがしっかと握られていた。

## 十 作文がお便りにのった

運動会も無事終わったので、私は作文を書かせることにした。＼しました。そして＼しました。＼式にならぬよう、かけっこならかけっこのことだけ、玉入れなら玉入れのことだけを書きなさいと繰り返し指導した。

Kくんは、国語の力の中でとりわけ読解力が秀でていたが表現力もすばらしいものを持っていて、作文も気が向くと、集中してとても良いものを

仕上げることができた。とにかく読書量の豊富さが、言葉の巧みな使い方にもつながっていたのだと思う。彼の題は「かけっこ」だった。

かけっこ

一の二〇〇〇〇〇〇〇〇

かけっこでぼくは五コースをはりました。いっしょけんめいはしたのに、Sくんにテープをきられてしまいました。ほんとうはりゆうのようにはしろうとおもっていました。ようちえんのせんせいがみにきてくれて、うれしかったです。

文面から、Kくんは、本当はコースをまっすぐに走ることさえ難しいのに、気構えだけは、彼のあこがれであるりゆうのように燃えていたということが、私の心に痛い程伝わってきた。それで、私はク

ラスの代表として彼の作文を学校便りにのせてもらうことにした。

十一 くじらぐも

秋になって、国語では『くじらぐも』という題材で学習を進めていた。学校の大好きなくじらぐもに語りかけたり、ジャンプしたり、背中のうって空を遊泳したりという楽しい内容だった。ちょうど空が高くなってほんわりとした雲も浮かんでいた頃だったので、私も少しでも臨場感を出そうと、校庭に出てジャングルジムの上に登らせ、「おーい、くじらぐもさあん」と語りかけさせたりして授業を進めていた。そして教室に戻って来て、音読を行ったり、ワークシートに登場人物の気持ちをなどを書かせたりした。

Kくんは、国語が大好きだったにもかかわらず、

もうその頃は教科書が無くなってしまっていた。整理整頓の苦手な彼にとつて、身の回りの物をなくすることは日常茶飯事で、教科書といえども例外ではなかった。そのつど、貸してあげていたのだが、Kくんのお母さんがまた器用な方で、手作りの教科書を持たせてくれた。絵も文字も、本当に美しく、温かさが紙からあふれていた。それを手にして朗読する時のKくんにこにことした、でもちょっと恥ずかしそうな顔が浮かんでくる。

「おい、くじらぐもさあん」

と心のこもった絶妙の語り口。

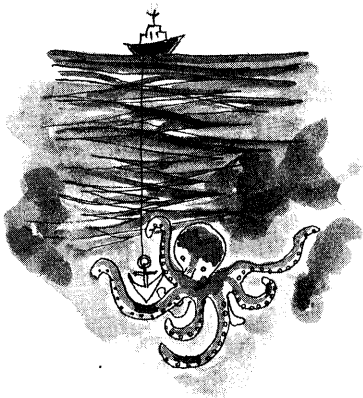
「あのくじらは、学校が好きなんだね」

子どもらしい声色で読む仕種は、周りの者を、文章の中へとひきこむ。自然、クラスのごことからともなく拍手がわき起こるのであった。読み終えたKくんに、Sくんがこう言った。

「Kくん、幸せ者じゃない、お母さんが作ってくれ

た教科書で読めるなんて」

Sくんは、下に赤ちゃんの弟が一人いて、お母さんは弟のせわに忙しい。ちょっぴり寂しさを感じていたのかもしれないが、私もKくんをとりまく家族



愛の温かさをしみじみと思った。

## 十二 鼻の穴にどんぐりが

校庭の大いちょうの木の葉が黄色く色づき、大粒のぎんなんがたわわに実った頃、理科では秋のはっぱの様子や、くぬぎ、こならの実の学習をしていた。そして教室の壁には、子ども達が集めてきたいろいろな葉を貼って作った絵が飾られ、窓ぎわのロッカーの上には、どんぐりがうす高く積まれるようになった。(秋だなあ) そんな感じのする一年二組の教室だった。

ある日のこと、

「みんな、このどんぐりで何作る?」

「やじろべえ」

「どんぐりごま」

そして、どんぐりを用いたおもちゃ作りにみんな夢

中になっていた時、Kくんはと見ると窓から外を眺めているようだった。

「Kくん、K! 席につきなさい!」

振り向いた彼のもっこりふくらんだ鼻にクラス中が注目した。何と両方の鼻の穴にどんぐりがつつこんであったのである。Kくんは、今までも口にいろいろな物を入れてしまい、幼稚園の頃に飲み込んだ何かが、胃の中に入ったままになっているといううわさもあったので、私は絶えず気にしていた。が、穴の中に入れるという子どもらしい発想は、危いが、分からなくもない。後日、おしりの穴にまでつつこんでしまったのはちょっと恥ずかしいが。

## 十三 初めての学芸会

♪どんぐり山のどんぐりは、

一年生は学芸会で『どんぐりのたび』というかわい

い劇を演じることになった。Kくんは、どんぐり達の水先案内人である。＼かに＼の役だった。会は二日間に渡って行われ、一日目は子ども達が鑑賞し、二日目は親達の鑑賞日に当てられていた。Kくんの作りが印象的であったことはもちろんだが、鑑賞のし方がまた独特であった。

当日、彼ほどの学年の劇も深く味わっているらしく、身じろぎもしないまま、目が舞台にくぎづけになっていた。そして例のごとく、くつはぬげ、靴下もおおげぐつ下になった。そのうち、片足が口の所まで持ち上げられ、くつ下を口でくわえ出したので、びろーんと、ものすこく長くのびてしまった。それでも本人は、そのことに気付かないぐらい集中し、演技にひきこまれていたようだった。

四年生の番になった。ミュージカル風のしゃれた演出で、楽器などが舞台上に並べられ、歌ったり奏でたりという場面がたくさんあった。運の悪いこと

にはその中に大太鼓があった。とたんにKくんの視線は舞台上から下へ移った。そして、一番前の席を飛び出して太鼓をドドンと両手でたたいてはニヤッと笑って席につく、しばらくたつとまたドドンとたく、を繰り返すようになってしまった。私はその日、ビデオどりの係もやっていたので、レンズを通して彼の動きに気付き、（誰か注意してくれないかな、それともビデオはこのままにしておいて自分のために行こうか）と考え始めた。と、

「植田さん、ちょっとKくん太鼓たたきに行かないようにおさえていて！」

という四年の先生の声。（それも、もつともなことだ）と思った私は、ビデオ係を中断して、Kくんが落ち着くようにマンツーマンでついていることにした。もつとはっきり言えば、力の限りふんじばっていたのである。

#### 十四 Kくんの花道

二学期の最後を飾ってのクリスマス会。盛りだくさんのプログラムの中でひとときわすごかったのが、Kくん個人の出し物、太鼓たたきである。

前の晩、お母さんから電話があつて、

「先生、本当にいいんですか」

「いいですよ。楽しみにしています」

「それでは道具一式、あしたの朝届けます」

えっ道具一式？ なんじゃなんじゃ？ 私はてっきり、よくあるでんでん太鼓でもたたいてくれるのかと思つていたので（一体の道具一式とは何か）とその晩考えていた。

翌朝、届けられた物を見ると、あまりに本格的なので驚いてしまった。〇〇と名前の刻まれた小型の祭り太鼓にはやし太鼓、それにひょっとことおかめのお面、獅子頭、おまけに豆しぼりの手ぬぐ

いとまさに〇一式であつた。

いよいよKくんの登場。手ぬぐいをきゅっと頭に結んだその様は、いなせな若い衆風だ。まずは祭り太鼓を力を込めてたたき、その次に踊るようなステップを混じえておはやし太鼓へと移動する。おはやし太鼓をリズムカルにたたいた後、ひょっとこのお面をつけてコミカルに舞い、また元の祭り太鼓へと戻っていく。そのあまりの素人離れしたたたきぶりにクラス一同、そして見物に來た親達もやんややんやとはやしたてながら、半ばあ然として見ている。遅れて來たM君のお父さんは、我子をとりにこねた代わりにKくんのパフォーマンスにズームアップ、片時もレンズから目を離そうとしない。

「Kくん、見直しちゃつた」

とは、彼が密かに、ではない大つびらに思いを寄せているSちゃんの弁。教頭先生も、U先生も見物に來た。と、突然Kくんは、ばちを置いて歌舞伎役者



演じる弁慶が花道をひきあげるところの六方。ター  
ンタンタンタンタタタタ……、クラスはさらにわ  
あっと盛りあがった。今日は、まさにKくんの花道  
であった。



夜、お母さんから電話があった。

「先生、どうもありがとうございます。Sちゃん  
にほめられて舞い上がってしまい、ぼくとSちゃん、  
龍の子太郎とあやみたいだなんて言って、幸せ  
そうに寝ました」

ちなみにKくんは、その後太鼓の会に入り、今も  
続けているが、本当の本格派をめざし、またチーム  
プレーもできるよう特訓中とのことである。

## 十五 あずきめし事件、一班の大活躍

三学期になって、Kくんは授業がおもしろくなく  
てよく壁の下から抜け出すようになった。いつ  
の間にか戻って来るので私も放っておいたのだが、  
次第に探索がエスカレートし、探しに行かなくては  
ならなくなった。が、他の子ども達の学習も進めな  
くてはいけない。一人の児童のために他を犠牲にす

ることはなるべく避けたかったので、私は体力が勝負という状況に陥っていった。

ところが子どもはおもしろく頼りになるものである。彼と同じようにして遊んでいるためか、あるいは本当はKくんのようにしたいのだが先生の手前がまんしてよい子になっているためか、Kくん探しは私よりうんとうまかった。とりわけKくん属するYちゃん以下三名で構成されている一班は、探すために全力を注ぎ、そして必ず誰か一人が伝令係となつて、

「先生いたいた、あそこの木の上にいた」と、言いに来てくれるのであった。

ある日のこと、給食前の四時限目、Kくん探しが始まった。またもや一班の大活躍。私より早く見つけた。そして彼を連れて戻って来た。

「先生、Kくんって給食、あずきめしだとよく食べるでしょ。今日のこんだて表にあずきめしって書いてあったから、Kくん、今日はあずきめしだよ。降りておいで」と言ったら、するすると木から降りて来たんだよ」

と、Yちゃんが得意になって話してくれた。

## 十六 乱れに乱れた修了式

三学期も終わりの頃、私は疲れから体調をくずし、一週間程学校をお休みしてしまった。入れ替わりたち替わりいろいろな先生が、一年二組の授業を進めてくださったが、Kくんの荒れ具合は相当なものだということが私の耳まで届き、また子ども達から「元氣の出る袋」なるものをもらって、私は寝床で涙したりしていた。Kくんのことでは校長先生に、もう少し学校全体でみていただけないか、とお願いしたが、あまり良い返事をもたえず、私は悩んでいた。それでも学年の先生の助けも借りてなんと

か体調を整え、三学期終了までの数日を、力をふりしぼって過ごした。

そしていよいよ修了式。私は独言を言って落ち着かないKくんを先頭に、二列を先導して体育館に入り、式が始まるまで体育座りをさせていた。

校長先生が舞台上に登り、挨拶をする。定年を迎えたS先生にとって、これが最後の修了式であるはずだった。多分、万感の思いを込めて話をしていただろう。突然、Kくんが校長先生に対し攻撃的な態度に出て、舞台によじ登ろうとした。(私の休み中、何か嫌なことでもあったのかな、私の校長先生への思いが通じているのかな。私の心とKくん的心は同じだ) 私はもはや止めようとはしなかった。乱れに乱れる彼のありのままを受け入れ、全先生に理解してもらおうことが大切であると考えた。体育館は子ども達のがやがやで騒然とし、校長先生の話し声はほとんど聴こえなくなった。

こうして、Kくと私の一年間は終わった。が、彼は私に、いや学校全体に様々な問題を投げかけてくれた。私は、この問題を常に頭の片隅に置き、決していく方向を模索していかれたらと思っていた。いわば一つの始まりの終わりだった。

(元・東京都小学校教諭)

※ LD児とは

学習障害 (Learning Disabilities: LD) 児

93 卷五月号参照